

杉田 浩一（昭和女大）

「食」は人類の生存に不可欠な要素であり、同時に文化的要求にも応える行為である。「生きる手段」としての食物摂取行動には、安全・栄養・嗜好などの基本的条件に加え、経済性や技術効率などが求められる。一方、付加価値中心の人間文化の象徴としての食物には、楽しみ・教養・団欒などの要素が求められ、両者は二極分化の途をたどっている。

「食」という行為は地球環境を含めた周囲の環境の影響を受けると同時に、一方では食行動自体が周囲の環境に働きかけ、それを変化させる要因となる。自然界の動物は環境としての食物連鎖を形成しているが、人類は一見その枠からはみ出し、「人と環境」、「人間対自然」、さらに「人間対地球」、ときには「地球に優しい人間生活」のように、地球が人類の所有物であるかのような表現もする。環境が人を取り巻いて存在するのではなく、本来は環境全体のなかに人もその一部として存在するのでなければならない。

「食」を取り巻く外部環境には、食料供給構造、輸出入を含めた流通構造、栄養摂取に関する情報、食の外部化などがあり、一方、内部から外部環境への働きかけには、調理排水、調理廃棄物（生ごみ）、家庭や外食の未使用食料や残食、さらに食料品店の販売残量まで、さまざまな要素がある。これら諸要因に伴うエネルギーの移動が環境に及ぼす影響も無視できない。「食」が人間生活の重要な一要因ならば、簡便性と経済性の重視、廃棄物ゼロの食物も大切である一方、効率は劣っていても、たとえば炭火焼きやデコレーションケーキのように、「人間生活」への付加価値を求める「食」も必要である。人間生活への意識と姿勢、大きくは人生観による選択が求められる時代であろう。